

平成21年 5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520319
 研究課題名（和文）中国保安族の消滅の危機に瀕した言語、保安語積石山方言にかんする調査研究

研究課題名（英文）A Field Study of the Jishishan Bonan Language Endangered

研究代表者

佐藤 暢治（SATO NOBUHARU）
 広島大学・北京研究センター・准教授
 研究者番号：90263657

研究成果の概要：

本研究の目的は2つ。1つは、消滅の危機に瀕した保安語積石山方言の全体像をフィールド調査を通じて社会的・文化的背景とともに記録し、その調査結果を公刊すること。もう1つは、その成果を現地社会へ還元し、保安族の人々との連携のもと、保安語積石山方言の次世代への継承に協力することである。調査を毎年おこない、図書・雑誌掲載論文4編と学会発表論文3編、およびそれらに民話などのテキスト12編とその語彙集を含めた報告書を発表した。また、保安語積石山方言が次世代に継承されるように、母語話者の若者と連携し、次世代に向けて使える辞書、民話集などの作成にとりかかっている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：保安語、危機言語、モンゴル系言語、フィールド調査

1. 研究開始当初の背景

保安語積石山方言とは、主として中国の甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治县大河家鎮大墩村、甘河灘村などに暮らす保安族16,505人（2000年）によって話されているモンゴル系の危機言語である。

保安語積石山方言は、現在中国の多くの少数民族言語がそうであるように、漢語からの影響を日々蒙っている。保安族の総人口のうち、実際に保安語積石山方言が話せるのは、大き

く見積もってもその大部分が漢語との2言語併用話者である3000人から4000人と思われる。しかも、次世代を担う子供たちはさらに深刻な状況に直面しており、一步一步消滅への道を歩んでいる。保安語積石山方言は、危機言語のひとつに位置づけできる状況にある。

筆者はこれまでに2000年、2002年、2004年の3度にわたり保安語積石山方言の調査をおこない、社会的・文化的背景とともに語彙、

例文、民話などを収集してきた。しかし、まだ十分ではない。筆者は、日々変容している保安語積石山方言を可能なかぎり、記録にとどめておくことはこの言語の研究に携わっている者の責務と考えている。

また、口々に民族語である保安語の必要性が唱える保安族の老人たちも、自分たちの言葉の研究はまだ始まったばかりなので、文字の策定をも含んだ継続的な調査を、筆者に求めている。特に、保安族の有力者である長老たちからは、自分たちが話しておきたいことすべてを記録しておいて欲しいという要請もある。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は2つ。

1つめは、消滅の危機に瀕した保安語積石山方言の全体像をフィールド調査を通じて社会的・文化的背景とともに記録し、その調査結果を公刊すること。

2つめは、その成果を現地社会へと還元し、その調査結果を保安族の人々との連携のもと、保安語積石山方言の次世代への継承に協力することにある。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成させるため、研究期間には、2006年度と2008年度までの3年間とした。

2006年度と2007年度は、8月に中国の甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治县大河家鎮にて、保安族の有力者であると同時に、保安語積石山方言の話者でもある大墩村の馬福全氏、甘河灘村の馬相明氏をインフォーマントに約10日間フィールド調査をおこなった。大墩村と甘河灘村の保安語は、それぞれ村の名前にちなんで大墩保安語と甘河灘保安語と呼ばれる。

2008年度は、北京オリンピックのため、西北民族大学大学院を修了した大墩村出身の若手研究者、馬沛靈氏を9月北京に招き、約10日間調査をおこなった。

調査に際しては、元甘粛文化庁長の馬少青氏とも連携した。

具体的な研究方法は、次のとおりである。

(1) 保安語積石山方言における全体像の記録

1. 調査項目の整理と準備
2. 調査
3. 収集資料の整理と分析
4. 論文作成
5. 報告書の作成

(2) 現地社会への還元

1. 『保安語漢語辞典』作成の試み

保安語積石山方言は当地の漢語の影響を大いに受けている言語である。そのため、その影響を将来明らかにするために、海外協力研究者として小高裕次（台湾、文藻外語學院助理教授）が当該地域の漢語方言（アルタイ語の特徴を持つ漢語）の音韻、文法、語彙などを調査した。

4. 研究成果

研究成果について、主な研究成果、研究成果における国内外の位置づけとインパクト、今後の展望の順に記す。

研究成果については、公刊したものと未公刊のものに分けることができるが、公刊できるもののほとんどは研究成果報告書に収められている。この研究成果報告書は第一部と第二部からなり、第一部は、研究代表者、佐藤暢治による保安語積石山方言の調査報告である。

この第一部では、大墩保安語のテキスト11編（保安腰刀、トリガガが変容した話、トリガガ、婚礼、大工と彼の妻、トダーエヴァのこと、ある人のこと、甘河灘の保安語、トリガガを知っているのは、知っている単語と知らない単語、息子たち）とその語彙集、甘河灘保安語のテキスト1編（保安人の腰刀）とその語彙集が収められている。このテキストは、現在、保安語積石山方言において利用できる最大のテキスト数を含んでいるものである。テキストは、国際音声字母で表記され、形態分析とグロスを施したうえで、それに対応する日本語訳が付けられている。なお、このなかにはすでに公刊されたテキストも含まれているが、母語話者と一語一語語彙とその意味を再確認をし、誤りを訂正したものである。

そして、さらに論文7編が収められている。

「大墩保安語の数詞「一」に由来するgə」では、そのgəが先行研究で言われているような単数接尾辞ではなく、意味機能としては「排他性 exclusivity」を表し、談話機能としては「談話の話題標識 discourse topic（談話の冒頭部で、談話全体の話題を導入したり、場面を設定する。談話の途中で、これまでとは直接関わりがない場面へと一時的に転換する。談話の途中で、転換した新たな場面に話題を導入する、談話の終結部で話題、場面を統括するなど。）」を表す「有生性の低い名詞句」の主格形か対格形のみ以後置する「接語 clitic」であることを明らかにした。

「保安語積石山方言における指示詞の現場指示用法について」では、保安語積石山方言における指示詞の現場指示用法が先行研究の述べるような遠近からなる2項対立（近=na系、遠=ta系）ではなく、聞き手の注目・知識が対象にないと話し手がみなしたとき、

聞き手の注目をその対象へ引き寄せる機能を持つti taを含めた3項対立であることを明らかにした。

「保安語積石山方言における存在の助動詞vi/vaについて」では、話し手（疑問文では聞き手）が文の表す事態を内的なものとして捉える「主観」形式viと、外的なものとして捉える「客観」形式vaという2つの範疇があるが、各範疇の性格から、自分のことを述べる場合にはviが使われ、自分以外のことを述べる場合にはvaが使われることが多い。しかし、自分のことであっても、「假定」、「偶然の発見」、「思い出」など話し手自身が存在や所有の事態を十分に制御できない状況下にある場合、あるいは質問文への即答として存在や所有の事実だけを客観的に述べる場合にはvaが使われる。同様に、自分以外のことであっても、人と人以外とは異なる振る舞いを見せるが、話し手が存在や所有の事態を強く主張したいときにはviが使われる。その際、一般的な事実、個人的な経験による熟知、推測がviとvaの使い分けに重要な役割を果たすことを明らかにした。

「保安語における1人称代名詞複数の包括形と排除形の区別」では、1人称代名詞複数の包括形と除外形の典型的区別というのは、ある集団を話し手側と聞き手に分けたとき、包括形は話し手側に聞き手と場合によっては第三者を含めるが、除外形は話し手側に第三者は含めても、聞き手は含めないというものである。しかし、保安語積石山方言における1人称代名詞複数の包括形と除外形にはそうした典型的な用法に加え、包括形には民族、村、宗教など話し手が帰属意識を持つ集団を表す場合、そこに必ずしも聞き手を含む必要はなく、聞き手を話し手がその集団と関わりがないものとして心理的に集団の外に置くという用法があることを明らかにした。

「消滅の危機にある高李保安語の現状」では、高李保安語の現状を、高李村の社会的背景、ある家族3世代間における言語の使用状況、孫の世代への継承は危機的な状況にあることとその原因、世代間における語彙面、音韻面、文法面の違いを論じた。

「甘河灘保安話的亲属称谓」では、甘河灘保安語で使われている親族語彙について、直系、傍系、父方、母方、夫方、妻方から整理したうえで、大墩保安語との違いについて述べた。

「我对保安语的研究」では、筆者がおこなっている保安語の調査研究について、その過程を書き記した。

第二部は海外研究協力者である小高裕次による漢語大河家方言の調査研究である。漢語大和家方言について、音声・音韻、語順および助詞“哈”と“啦”、アスペクト助詞を論じた。

音声・音韻については北京音との違いとして、声母は[t]および[tʰ]は齶歯呼の前ではそれぞれ[tʃ][tʃʰ]と発音される、[ʂ]は合口呼の前では[f]と発音されるなどを明らかにした。そして、韻母は、ゼロ声母の語における齶歯呼の介音または主母音の[i][y]音が、摩擦を伴って極端に狭く発音され、[j]のように聞こえ、語によっては半母音の[j]のように発音されることなどを明らかにした。また、声調については、北京音の第一声と第二声、すなわち陰平と陽平が一つの声調に収斂し、三声調（平声 35、上声 55、去声 51）であることを明らかにした。ただし、連続声調については平・上・去の別ではなく low tone と high tone の組み合わせが多数を占めるようであり、今後に残された課題となっている。

語順および助詞“哈”と“啦”については、漢語大河家方言の注目すべき特徴に位置づけできるものである。語順は、臨夏方言や西寧方言と同様にSOV語順を基本とする。助詞“哈”は目的語を示す。助詞“啦”は、臨夏方言や西寧方言と同様に道具を示すが、大河家方言独自の特徴として、出発点を示す用法の存在を明らかにした。

アスペクト助詞については、周辺の諸方言と比較すると、臨夏を中心とする河州方言と西寧を中心とする青海方言の特徴を併せ持っていることが明らかになった。

未公開資料としては、今後の展望にも記す「保安語漢語辞典」の作成にも関係するが、使える辞典を目指して作成途中にある資料がある。また、文法事項に関して先行研究にはまったく言及されていない一般言語学的にも興味ある現象（証拠性 evidentiality、3人称代名詞など）について、現在整理の途中にある。

次に、研究成果における国内外の位置づけとインパクトについて述べておく。

鍾進文(2007)『甘青地区特有民族語言文化的区域特征』中央民族出版社のなかで詳細に述べられているように、佐藤暢治がこれまでにこなってきた保安語積石山方言に関する一連の研究については中国でも高い評価を受けている。それ以前は、1950年代後半と1980年代に調査をおこなった旧ソ連のTodaeva, B. X.、中国の布和 劉照雄、陳乃雄、アメリカのLi, Charles. N.による研究があるだけであった。現在、佐藤暢治の一連の研究により保安語積石山方言の研究は飛躍的に発展しているといっても過言ではない。

また、佐藤暢治の研究は保安語積石山方言の話し手である保安族にも少なからぬ影響を与えている。その影響は、西北民族大学大学院を修了した大墩村出身の若手研究者である馬沛霆氏のように、調査を始めた当初で

は思いも寄らなかった若い世代から自らの母語について真剣に考える者の出現という形で現れている。この馬沛霆氏は、現在、「保安族文化網」(<http://www.baoanzu.com>)の管理人として保安族の文化を世界に発信しているが、また私の良き研究共同研究者の一人にもなっている。

最後に今後の展望について記しておく。佐藤暢治の保安語積石山方言に関する研究は、2009年度からも3年間の予定で、基盤研究(C)『消滅の危機に瀕した中国甘肅省、青海省のモンゴル系孤立諸言語にかんする調査研究』として、これまでの研究を引き継ぐ形で続けられる。

モンゴル語の歴史研究のみならず、言語接触研究、文法理論など一般言語学の発展に貢献できそうな興味ある現象もいくつか見つかっている。こうした点も従来からおこなっている語彙調査、テキスト収集に加え取り組むべき課題であるといえる。

また、近年、中国から杜鮮主編(2004)『保安族—甘肅積石山県大墩村調査』雲南大学出版社と、莫超 張建軍(2008)『保安語常用詞漢英詞典』甘肅民族出版社が相次いで保安語積石山方言に関する資料として公刊された。しかし、これらは残念なことに保安語研究者の手によるものではないため、保安語について記した箇所は分析、表記がかなりずさんであり、まったくとはいえないが、ほとんど役に立ちそうにない。辞書については、現地社会で確実に使える辞書というものの作成を、現地社会への還元のひとつとして、保安族の馬沛霆氏とともに優先的に取り組むべき課題として作成中である。さらに馬沛霆氏とは、研究成果報告書に収めた大墩保安語のテキストの一部を漢語版で公刊する準備も進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 佐藤暢治 (2009) 「保安語積石山方言における指示詞の現場指示用法」『東アジア言語研究』11、1-11、査読あり
2. 佐藤暢治 (2007) 「大墩保安語の数詞「一」に由来するgə」『国際協力研究誌』14-1、27-44、査読あり
3. 佐藤暢治 (2006) 「甘河滩保安話的亲属称谓」『北研學刊』3、86-88、査読無し

[学会発表] (計3件)

1. 佐藤暢治 (2008) 「保安語積石山方言における存在の助動詞 vi/va について」『日本言語学会第137回大会予稿集』190-195 (2008年11月29日、金沢大学角間キャンパス)
2. 佐藤暢治 (2007) 「保安語積石山方言における指示詞の現場指示用法について」『日本言語学会第135回大会予稿集』214-219 (2007年11月24日、信州大学人文学部)
3. 佐藤暢治 (2007) 「保安語における1人称代名詞複数の包括形と排除形の区別」、日本モンゴル学会2007年度秋季大会 (2007年11月17日、九州大学六本松キャンパス)

[図書] (計2件)

1. 佐藤暢治 (2009) 『中国保安族の消滅の危機に瀕した言語、保安語積石山方言にかんする調査研究 (課題番号18520319)』平成18年度～平成20年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究成果報告書、200頁、広島大学
2. 佐藤暢治 (2006) 「我对保安语的研究」、馬少青主編《保安族研究文集》甘肅人民出版社、324-329

[その他]

1. 日本言語学会第137回大会発表要旨
<http://www.soc.nii.ac.jp/ljsj2/meetings/137/abstract/414.shtml>
2. 日本言語学会第137回大会発表概要 (中国語版)
<http://www.baoanzu.com/mzyy/xwdt/2008-12-10/198.html>
3. 日本言語学会第135回大会発表要旨
<http://www.soc.nii.ac.jp/ljsj2/meetings/135/abstract/521.shtml>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 暢治 (SATO NOBUHARU)
広島大学・北京研究センター・准教授
研究者番号：90263657

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

小高 裕次 (KOTAKA YUJI)
台湾文藻外語學院・助理教授